俗寛僧都流刑記

へ13
3140
8

門へ13
勝3140
巻8

俊寛僧都嶋物語巻之七

東都　曲亭馬琴編次

駿河屋志七

第十五套　抱雪向日葵　鬼一法眼が事

牛若九へ鬼一法眼を怒らしく。真の虎の巻をえたりやとも思ひ
うべ。その書の疑しきを論辨しく飽まで嘲哢遂に引裂て捨ひ
ちうべ。鬼一法眼大に怒り。直に長刀をりく。ひけんとさるを。
卿曹司へうの去りはじ。扇をりく受へうがし。前にあらくれ
ば。忽形をうく後にあり。数回悩しの人に。舞鶴徒手九も。れを
禁めねば。ほらく。せんもべるに形をく。頂の上より。物の崩かくれ
ちく。羅ちちく白刃の燒に。煙と落るのあり。これ蛾王と港
海ろう。この鄉音に燈燭も揺うれく。忽地暗ちるりつ。件の所人

昭和九年九月十二日　購求

ハ落くるとなれよ。組しる手を放ち。左右へ撲地と捩びつ。遠しく
身を起し。互に拳を握り固めて。打んとするを。鬼一ハ長刀を
直しく。蛾王を遮り住め。牛若丸ハ扇をさと翳して。湛海が
顔へさし翳へば。湛海ハ焦燥く。解刀を閃りと引抜矢
庭に曹司に跳かゝる。勢ひ猛く。丁と刺を。牛若ハ身を反し。
衝と入れて湛海が。真額臨て扇の骨も。碎けよと。続さま丁く
と打付く。怯むところを脇ろく。脊へ高く積あげつ。やゞて
刀を抛ちうへば。云ハ杉をしとく携へて著を。母ちうちハ
よ世の著ぞ。肩尖四ツ砕さげ。湛海ハ阿と一声。叫びわめく
ぞ尻居に倒れ。疵口抱へて起んとす。蛾王ハこの景迹に鬼一が長
刀を跳踰湛海が頭巾の頭項をえん廻て。捻挫んとく曳ぞ。

頭巾を結びしる。絡ぶの紐の。弗と断るをとりて。やよ笑ひ
ぬといひるゝ。頭巾を後方に掻遣捨ぶ。云ハいるに。白河う
荒法師。石投の湛海と名告しハ。蛾王が兄亀王なり。蛾王ハ
これを見て。云ひうけねば今さらよ。さとゞ骨肉同胞の今般
の苦痛ぞしが引もらるゝぬ。浮世の義理の
掛に。疑ひなの解ざるゝ。當下亀王ハ。鮮血を吸ひく息と
吻き。前夜といひ。今宵といひ。野干毛の烏夜すれば。身ハ見えぬ
ちぶざりなん。兄弟播に聞ども。その侮を禦ぐといハハ。これと彼ハ
ゝるべし。いひあへど主君を救ハ。志ハ一点しかなど。彼れを
えんと。指さゝぬで。蛾王ハを聞しつ。舞鶴を見て。旦怪しく。旦彼ひ
云鶴の前。みくおりく。宮津の浦。みく安良子ゆ。とあ。墓ゐく

うつむひぬ。と思ひ定てゐひしよ。恙なる面象を。見るこそ珍しけれ。そもいかなる故ぞ。そみれ隠びて坐さん。さしもの信ずる。同じも絶て姦せど。蛾王いとゞ忌ひ。又右手を見えて。ある稚君も。恙なくて坐さよ。姫小前よ環會。さらを欲び。おぼさるめ。いろふしそら鶴の前いそのの艱を受ひし。受しられしるあるべ。さしもの。そもいかよと問ども徒事か改まち掉れも又問答せど。蛾王うたねて。左辺を見えう。牛若丸よおうたまう。鬱よ笑えもへぶぶく。此曹司へ来や。この山荘よ潜び入りまくりと。豫て忍ひざるよりねど。鶴の前めらを。知食てやうひまひしし。やくてろ絶ぶくいと。と呟び。牛若丸もまさ所。そもひえ只一時。別まくより四年を経る。鶴の前。その容止も楚と怨ど

加文。今い世ようれ人と笑くよ。この舞鶴が。鶴の前おくもべし。と。忍ひもうけど。られいさうねど彼い去りつ。名告ぶうしん丸。そもあるめ。と回答もへば蛾王い。いとくさく疑ひ惑ひ。あゞ鬼一法眼を。法くとうち親り。あゞ母つる。改よ雪を載さく。眼中のあゞくし紀。夷狄の王とも。いひつべき形勢られど。何と。ゆうんうが主君。俊寛僧都よ似うう。只不審。とい間う。滅うんうくく又明さ。燈の下うる格の前い。主ととえて勝臘と形い消く隻袖と。只一枝の経冊のあり母うよ残う。うさそかとだう蛾王い。牛若丸と面をあし。世ようる魂の幻よ。もだし見えく妹夫の。契をうさび結びるい欲。嗚呼痛し経うと。全手抗く。目を押拭へば徒事丸も。たゞめく曉るる姫

牛若御曹司

鬼一法眼

の。消ぬるをうち瞻て。惜然と住ける人が。牛若丸か殊さうよ。夢
よ夢うゝ忽おもしく。忙然として在ける。が。忽地小膝を碾と拍
られゝて。忽ひあがるとあり。鶯よ彼少女が。鏡をうく誓うせし
うを。鏡の中よ忽然と。髑髏のうつりしうが。云怪しとやよ。彼よ。その父鬼
一法眼がゝのいひざま。四国九州うどゝて。生育うる人とも。笑えど。
よくとうよ疑ひうがゝ。それとも必ず定めねど。今夜猛よ婚姻の
をいそぐ。又真の秘書をうゝざるを。ゆうられよ授く。竊よこれを
試しよ為体ゝよ八九ハ猜しられが。輙く婚縁をうう締し。さて
彼兵書を引裂く。絳のうよ。うぐうう。されども。結髪の妻うう
をうゝられぬうちとけうるよりも。兵庫の巻をさえ為よ。かれぬううへ
の靡ぬれ。秋胡が妻を面恥ぬ。男の名をうれわる負
しゝ。明のうう。鏡ぬゝうぞとゝうぐども。至誠のううとうう。面あうう
その魂を。うる。嗚呼奇うるうる。奇うう。と数回嗟嘆ゝ。彼組冊
をうあげゝ。

きも香も春を奚ふる梅が枝よ締びし実さへうくせあうえ
ぬ。ハられ。番縁の納聘ふゝ。つぶ猿ゝう。梅が枝よ。えし小杓の笛も今
猿の像見とうう。うるうも。この世彼世へうつ袂も。長き別の隻袖ハ。
猜ぶうひうを縁しようを。と昔をゝ人慷慨の。ゆうゝぞうゝえ。
蛾王ハこの物語よ。ゆうゝ曉ゝ。ゝ。ゝ。点。鬼一法眼よ。ゝ。
田亂の鷲と化し。雀も雁とうるうりゝどゝ。ゝ。面教の変りゝ
ゝうる。今ハ遥ゝうゝうる。俊寛僧都と名告ゝ。年ゝ
折千磨しゝ。忠義を竭ゝ仇の為ぞ。ゝうつゝと。怨どれ

徒歩のハたらゝ。涙を袖のくれなゐ人。ゆゑ昨夜不意も。亀
王と伴まゐく。姉君と環會ぶ。ふたび妻このあん顔を見るゆゑ
なれど如此ゝの故あれば。又ゆゑいひそ。姉ともいひ人は。
同胞親と仕まつる。姉ともいうさぐ墓ゆくも。今宵ゆゑ一妻の
迹。世ゆゑ人と成ゆゑ。同り笑えもとべ。ゆゑ妻ありゆゑ
いつまでも。同胞ゆゑ居ゆゑ。ゆゑ死
口惜つ法ゆゑ。ゆゑ鬼一法眼。果ゆゑ袖の雫浮
世の秋ゆゑぬ。僧都がゆゑ果ゆゑ。ゆゑ面
ゆゑいひつゆゑ袋戸開く。ゆゑ出ゆゑ案の前の位牌ゆゑふ
拝の前の像見の袖を両の手ゆゑ捧ゆゑ。ゆゑ見ゆゑ。秋子同胞
翁。人の家隷。それが妻子。ゆゑ集合ゆゑ今一ゆゑ面を合

しゆゑ歎べし。歎ぐん。ゆゑ。妻と女児の世みもあるぞ。安良ゆゑも
枉死ゆゑや。亀王もゆゑ你殘ゆゑ。涙ぐゆゑ見えぶゆゑ。死
ゆゑの世ゆゑ。生死流轉の苦海ゆゑ。喜怒哀樂の四緒ゆゑ
惑ひゆゑ。ゆゑの罪を作ゆゑん。彼成経康頼ゆゑ。俊寛ゆゑ。
ゆゑ荒磯へ流ゆゑ。流ゆゑ。ゆゑ日の同ゆゑ
日同刻ゆゑ生ゆゑ。同日同刻ゆゑ死ざるゆゑ。悲ゆゑ。彼ゆゑ
ゆゑ命凶幸ゆゑ不幸ゆゑ。ゆゑ。
人を咎ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ海の底の水屑ゆゑ
ゆゑ。ふたび天の土へ顕ゆゑ。不幸の中の幸歟。不幸ゆゑ
の不幸ゆゑ歟。それも又塞翁が馬ゆゑ警ん。鬼界ゆゑ
只一人。ゆゑ残ゆゑ俊寛ゆゑ。鬼界島の鬼ゆゑ。一人残ゆゑ

一を[illegible]。鬼一法眼と名を更め。去年の冬より堀河に橋[illegible]
し。近曽[illegible]は山居[illegible]る。縁故を物[illegible]ん。仍曹司も[illegible]
抑去年の七月の比。徳寿は倶し[illegible]蛾王が。嶋[illegible]を見ねる[illegible]
[illegible]。[illegible]が子[illegible]が家隷[illegible]が。いと[illegible]浅[illegible]げは[illegible]を[illegible]
[illegible]も新獲。[illegible]は名[illegible]も。俳[illegible]牙[illegible]
[illegible]も。又いと[illegible]。物を[illegible]。竹の杜は一首の歌を
書遺し。[illegible]出て荒海へ跳入る。[illegible]小船一艘漕[illegible]
聽て[illegible]牙を助け[illegible]は勇[illegible]
[illegible]。[illegible]その人を[illegible]が。亀王[illegible]。亀を放ち亀は
救[illegible]し。唐山の毛寶。[illegible]國の知[illegible]。[illegible]が。いふ[illegible]
それが妻[illegible]と[illegible]。渡海は[illegible]抱[illegible]。不審[illegible]

が。[illegible]俊寛[illegible]を名告[illegible]。[illegible]海水が[illegible]の小
船は[illegible]。いつ[illegible]と[illegible]は亀王夫婦。[illegible]
与翔の海[illegible]。暴風は吹[illegible]。[illegible]首彼首は漂流し。嶋[illegible]島
は日を送り[illegible]。幸[illegible]命は繋げ[illegible]鬱[illegible]住ぬ波の上は漂[illegible]
五六箇月。[illegible]白石の嶋を[illegible]。[illegible]荒磯は漂着し。不[illegible]
主君の必死を救ひ[illegible]。[illegible]が[illegible]。月日は[illegible]
[illegible]は[illegible]。[illegible]神仏の真助[illegible]。
亀王丸が練る[illegible]。死を[illegible]。瞻太くも。鬼界嶋を漕致
[illegible]。追風[illegible]。次の日肥前國は[illegible]。[illegible]経は由縁の
地[illegible]が。加世の庄は且く疲労を保養し。主従四人密は洛へ
[illegible]る。亀王渡海は[illegible]の罪を勘解[illegible]。彼が遺ひ

失ひしかの金を贖んとて。千辛万苦調達せしかど。五十金を返し納まらざるに。それを路費として。摂津国まで立ちかへる日。くらゝざる鶴の前より環會。且敢び。且所々。その故を問ふ。搭の前答へて。近曾安良子と名乗る。越ろ水江なる。黒居三郎所赴く中途。宮津の浦なる。盗賊に劫れ。安良子は遂に殺されぬ。辛じて浦人に助られて。笘屋の中に一夜をあかし。次の日より彼此を呻吟して。頻に月日を過し。ようやく惑ひ来りしとぞ。その名ありしを嗟嘆し。且その恙なきを歓びて。なほ洛へ赴き。嘉義に軍要の為ふべしと。鹿谷なる山荘に招ぎ。金三千両を亀王に。霜に堀川に家を設りぬ。さて山荘を修理。軍学の達人。鬼一法眼と稱して。その名を世に聞えし牛若に授ん為なり。されば元来法師なるに。兵法をもくるしめらるゝ。虎の巻のと。匡房卿の訓図集に載られしかど。それをもまして。彼郷手つゝ。くさぐさの口決を書加へ。天仁元年春の比。鳥羽院へ進るを。勅封せらるゝ。これを見るものなし。志ろ新に洛義のたぐひ。亜相成親卿。平家を滅さんと謀るを。彼書を度白河院に。平家追討の大将軍に頼まる。長田藏人紀綱に。俊寛に預ひしかど。これはくぐと紀綱が為人。一を見て。鹿谷なる。言を慎ぶ。ちゝろ弘くて。挙動のたゞちに。ひろくしく件の秘書を遍与さるゝ。ちゝろぶも。鹿谷なる。年若丸に対面し。その武勇才学。世の傑なるを知りて。景慕のあまり。安児と

聟縁を結せし時。虎の巻をを進らせなや。と宣ひながら。成親卿へいひおくらく。わが私にまなぶるにあらねば。只小枝の笛をのみぞ。狩兵とせし。その夜わが身ハ六波羅へ捕囚れ。鬼界島へ配さるゝに及びても。かの虎の巻のことハ人にもかたらざりき。身をも殺されて捨るなり。かれが季札が剣を掛し。志を空しく。わが身ともに其の秘書の。孤嶋に亡び失なんかといと心苦しかれば。死すべきをも一死せず。面影の変りしを頼みに。都て洛へ潜びのぼり。頓に虎の巻の口伝を稱するもの。清盛入道が聴するに應ぜず。竹園槐門の招にも赴かず。牛若丸。その書のうハ傳聞て尋ね来る人からとふらくいろに猪なれば。果しくハ曹司ハ。ものびて山荘に往来し。結髪の妻ともなるべ。傍の者に案内させ。密に虎の巻をとらんと

奸狡なる人をも猜し。今宵まづ庸常の兵書を授て。以是を試るに。忽地その書の真ならざるを論破し。立地に引裂捨しるる。その智その勇。感激に堪ぞ。なかりとも年なほ少し。剣法を世の人の稱噴する程なれ至りなれど。これをも試みなや。と宣ひて。謀りなるおりもし。長刀をぬきかけんとせしに。俊寛なんど叔。百人あまり合しありとも。屑とするべうもあらず。その軍枝ある。手力雄命にも勝さるべし。かく於大将。兵法に熟しかかる龍の雲を得るがごとなん。驕きる平家を討滅して。武威を海内に輝さんもの。此の君にあらずして誰ぞや。これこそ真の虎の巻なれ。受納なべかりしど。叮嚀に説示し。頃に掛る錦の嚢を開きて。一巻の兵書をとり出しつ。進らすれば。牛若丸ハ数回押

裁ちて。天に訴び地に泣び。浅くね養山の賜と書に用ひ
勝ずを。惟幕のうちにめぐらし。ひが爲おい父祖の仇養山の
ゐ家人の仇なる。平家を日ごと討滅し。且一天の君のあん
爲に。四海を掃清んと。牛若が方すにあり。頼りうれと固
答へ。血に塗れる富士の頭を擡て声を励し。空に倫廻悲
報の脱れがたきまでにあり。今ぞ悔ぬ出ぬ。後
悔そらにねども。餓悔あり。五逆十悪の罪も滅ぶとい
ひて忠孝を等閑にする。世の社伎の賊に。うれと共に面ぶせ
なる。今般に始める物語聞て憐と哀せ宋襄の仁。微生が信。假
初なるは海渡がうれたを救んとて。主の要金を借り。
必死と定めて。子に代なる親の慈悲。又三郎が遺賊に後ひ。夫

婦阿容と存命つ。いるあもしく彼金を。淵淀ぞや。と且又。
いくその胸を苦しめても。なるもるれ浪人の。丹後の浦嶋子
船漕て。流れ渡りの楫枕。公に森て彷ど果報も来ど。せんなく
竭て悪汁人の女児を拐掣し。道なるね金も。五十金
あい満汐の闇の夜船へ女子が。人に追まく逃隠れを。情を被て
助け乗せるに。倶にする女子の手員なれど。ゑなるい雄こしくて。賊
なるイ。曉なる。気色なるが憎れば。只一刀に。水底へ脱を破ると
せしが。その養い主の少女が隻袖を握りて。主後なるこも
牙を投るを。引留んとしてつぶ手に残れし。隻袖さえ切離て。沈を果ず荒海の。そこなるくもるるれば。
と断離て。沈を果ず荒海の。そこなるくもるるれば。
罪を作ぬと呟れるが。妻と子の。和漕戻と子の海。波風

猛く吹あれて。てよ一ヶ日彼首よ二日。嶋より島へ漂流し。
ども鬼界嶋の磯へ吹よせ。主の必死を救ひ進ぜ。
命運の未あるべく。やがて僧都のあん供して。洛へ帰りのぼる。
身蛾王ぶ稚君と俱して。嶋へ渡りて縁由を僧都の宮へ申し
る間よ。案の前。鶴の前。孔安良子が枉死の事。鮹ぶ弘させ
袖のうり。ゆがてるど手謝の海あく。ぶ手よ殺せ女主後ハ捨ろ
前と安良子ハあんぬると。ひあんぬ渡海も。ぶ数よ伏院めど。
明白あいよるる。日数経て主後三人。捨州まで帰り来るよ。
瑞るくも捨の前よ逢ぞ。悲るれん容止を見るーぶの
ぶーさん。言結よ述も尽しがて。ぶ尽りひとや。ぶ殺
せんれ入るべで。捨の前ぶくよんさん。今眼前ぶ蟬の裳脱し

君ぶ隻袖ハ。ん忘ぬも。揚箔の。仏も神も捐るん。亀王が牙
の悪報。輪廻よ到る。竹鋸ハ天三郎が今般よ。竹ぶ他
縄刀ぶく。仏曹司よ破ぶ。ぜ。ぶ。ぶの世の罪障消滅。器械
ぶくハ。早技の手煖煉ぶく在ぶ。竹ぶく挽ぶ罪犯ぶく
ハ。身甲を。ぶ。隅ふく。ぶの竹鼠が入るべ。欲。殺の少女を拐。
果ハ主君の姫君と。身婦を手よぶ。ぶ。ぶれハ主を裁し。殺の
枉死も自のぶと業因。煩悩の難。苦海の澳よ。漂ひ流ぶ。ぶの
岸を。殺よ離ぬ隠慝の報。ひぶ。ぶ。ぶハ。法勝寺よ由縁ぶる。
主を不測の海よ救ひし。ぶ。ぶ直よ白河の遊海と名ぶ。法勝
を横紙しく。人よ殺ぶ。昨夜ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
徳寿の君を救ひ。身よ物を。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

枝人あらぶり。ゝみ。ゝと。の齟齬。鶚の嘴の長うれと。祈らねどゝ母速き。天罰ゝくとそあり。れと。牙を恨ゝ諸肌脱べ経惟子の袖ゝぞ綴あハしゝる。捨の前の隻袖をゝれゝゝくゝと。えゝく酸鼻。与翻の海ゝくゝぶ手ゝ残ゝ。その隻袖を證据ゝ。功成のゝハ由縁のゝのゝ。拏ゝゝく罪を滅ゝん。と云人ゝのゝゝ捨ゝゝゝぶ。豫ゝゝる紀ゝと覚ゝ死せ。四年を死生の旅衣ゝ綾あハしゝる主従が。過世ゝ中紀讐歃。両の袖の今さゝゝゝ全聚ど。そのゝひゝる。斯君の怨歃ゝれハ。徳妻君もゝの竹刀ゝく。亀王を刺ゝ。蛾王も一刀ゝれを砕ゝらどハゝの年末。猪ゝ忠義も化とゝのゝゝん。ゝく砕ゝと。甫畠ゝく。ゝん。ゝうえゝ掌を合ゝ。腸絞る紅の涙ゝ鮮血深ゝゝ。時ゝもあれ石室の階子の上ゝ。鮮血ゝゝ下

ゝゝ。阿と叫びゝ亀王が。母ゝく撞と落ゝゝれ侍女香樹ゝ。刀をゝく。咤を刺ゝ。いとゝゝくゝゝる息の下ゝ主と夫ゝゝゝ。亀王どのゝゝくゝの。罪ゝゝゝゝ渡海を香樹とめゝれゝゝゝ年の冬ゝ。夫婦ゝゝゝ給事。不忠不孝をゝゝゝゝ。贖ふ時の至りぬ。歃ぶゝひも懇ゝ。恩を仇ゝる刃の悪業。八劍ゝ劍ゝ。経ゝ恨ハゝゝ波ゝく。環會ゝゝ。捨の苦ハ。亡魂の迷ひ来ゝ。我同胞ゝゝ結髪ゝゝゝる。曹司ゝゝの寛ひゝと。ゝ仕ゝゝハ夫ゝ。先ゝ死ゝべき渡海が。後ゝゝゝゝ面ゝれ。嚮ゝ家ゝ蛾王ゝ。ゝゝゝゝ。と組留ゝハ夫ゝ。吐嗟。と云ゝど灯ゝ滅つ。烏夜の井筒へ搏び墮ゝ。夫の安危ゝゝゝゝゝ底ハゝゝ空井の中へゝが身も共ゝ飛入てゝゝゝ携ゝ芸索をゝゝゝゝ中央ゝ

下りてハれ呼く一五一千の。物ぐるしきうち驚き。下るにも猶下られ
ず。上るにも猶のぼられず。宙有に迷ふ有さまを。あれ名紀知ありまさに。
これらかくハ天罰の。刃に纏まつて仕るなり。三年過ぎし夏の比。
水江にて夫婦のもの共に死んと思ひ定めしより。脱も更ざる経
帷子の。汚れめえぬぞ。煩悩の。垢れ濯がで罪をます。罪をますさせし
妹夫が。金を奪の悪因縁あり。これぞせめたる。恨も果ハ脱れぬ
泡沫に常なる。前世の悪報ありしん。奪させしへどら。口説言ひて
拝む深痍の苦痛を。わが身に思ひ比べし。亀王より蜷蛭王ハ。慈めて
逢し鰻と児が自滅を理とも。いひたくて得うちる其が俊寛頓
に嘆息し。知ハ名にある大悲山佛の慈悲も救ふなし。その石窟ハ
命を延る池仙の嵐にあいぞして。おのくの人々の血を縮め。しくそなくそ

の呵責に苦しむ。一百三十六地獄の中央にぞありなるも。かくあるべしと
それは又豫て思ひうけざるものあらず。鏡の前が須日の為作。不審と思
ひしが。悪魔降伏の秘符と称して。家の四隅に注連を引まはし。柱に
鏡を掛けるに。その鏡に女児が影を移さず。いふところのさまに今宵
婚姻をいそがしく。半巻丸と妹夫の盃をさしけるに。そこなる物のあれが。く
なる影に阴曹司ハ。その眼力さへ人に勝まさり。鏡の中に。鶴の姿が白骨と
見なしけハ。眼前の美人。皮袋の臭骸。迷の門を出して座銭し。亀
王蛭王渡海安良子ホが志を。さて忠孝にありながら。さては雲涙の差
別あるなかの。おのく天より稟るところ。狭善悪應報の理。汝に生て。汝
に返る。亀王ハあらぞしく。鶴の前を入水さして。又黒居三郎。身婦
ら。良子ホに枉死させしる罪あれども。俊寛が必死を波底に救ひ。徳

が縲絏を立地より解えれば。その功をもて。彼罪犯より換るより是まで。ようく
る紀雄叛に同意しく。三年孤嶋に沈淪し。妻子を喪ひ家緋
を非命に殺を俊寛が作せし罪科か。贖ふようもかくやらむ。竹刀を
羞るふもおろかに猶る牛若丸の武術。竹刀をもく亀王を。撃ふ
るく手のうち。彼虎とえく石を射る。漢土人の故なりし異
るらむ。古今独歩の大将に。若ば縁しれありるらむ。一夜の添臥中の恋
しく。ひるくるくるし。搖の前が。幻にあらんかもかへる瀬ぞなき
翔の海。ひく絶るえの悲しえに。ひれふしえ世を去りしる。案の前
に羞しと。おのれを責く情ある。主の言葉に亀王夫婦。徒蛇王
りるもに。只潜伏と泣に。牛若丸に。彼の。物語に嗟嘆しつ。
ひるせば亀王に。傷ぬあるべきあるる。白河の湛海に世の人に忘
婦ひく悪僧ひく。と笑ひるに。蛇王と組ぐ墮。ひれに人聚て
ひるしうば。忽地刀を奪ひひく。只一刀に砕伏しるか双に
あるぐ竹篦のおし手に潰る即射即周。くの打扮に仰げ
るく。可惜壮使ひるるを。勇士を憐む良将の一言に励され。
亀王夫婦に眼を瞬き。こに有ぐ。ひれに御殺ひ。ひの
くのあん情あんで速にあん手親首を刎てひられしと。
ひるしもあんど。身を反くし。項を延く合掌を。浩知にひくの
祝ひ僧び入りるん。平家の侍。丹左衛尉基安。二つの首桶を
携へく。四人の駿兵をおく。石門の陰ひる前に入り。左馬頭義
朝の末の子。牛若丸。頻に隠蓑を企。延曾治対に美を飾
鬼一法眼が女児。舞鶴姫許ひる。風ぜかられる。加藤

鬼
閻魔王
閻魔王

法眼も。ふるく虎の巻を惜みて。入道相國の懇望に隨ひ給ふ。
ば鬼一は源家に志を運び。牛若を女聟に
傳授するあどめとんぜんとて。鬼一を呂龍。牛若を鶴が首
を刎て進ずせうと。基安仰をうけ給ふ。甲夜に牛若のあとを
跟て行まうと。縛の為体をうかがふ。されい色入道殿の
御殿を踏るまで。去年の七月皇盛公重盛
（治承三年八月朔日熊野詣の久さ幾頃に憂を命ず。）
に。俊寛は。法師なれど。志気ある物なり。
と偽り近き寺に立籠り。法勝寺の池の蓮一ツの莖に二ツ
の華さくとあらば。彼ホ親子。もや俗に帰りぬと云。中く牛若が
うかが入道ぶめ。常盤が色に惑ひて。助命するものなれば。それが平家を

滅しく。父の寛を雪んと。ろ人は。人の子なるものゝ。
を嶋にあらせ。牛若を対ろ人とも。入道に行狀道理
稱ず。官位人臣のうくを極め。一族驕奢に恥ずく。民の
うらうらひるに。家久しく栄んともおぼえず。入道殿仰
と宣へとも。彼ホ世に滑べるどい。放しおけいと宣ひしが。果し
て去年の秋。法勝寺の池に。並頭の蓮華開ぬ。そに至て。いとく
小松殿も。稚化の前延に。感悟し。俊寛僧都が。私に
帰りしを。まるるめに。基安のを。加之。某曩に。宇治にく徒
主従を放し。栄の前の死首を携へ。入道相國に
うらくとる。豫て小松殿の仰せあり。それば。今夜に至て
手を空しく帰らんや。牛若丸と密會する鶴姫。寺谷

案山四郎夫婦を殺しうる蛾王ホ。既よりの震顕く。脱るく
道の石室よ入く自殺を。今まづ鶴蛾王が首を刎ぬ
入道相國の音よ聞さぶ。鬼一法眼を勧向し牛若丸を捕
捕うん。この首桶ハ案山四郎。夫婦が屍の傷より残しる胞衣
桶うり。人を殺さりのハ殺され。人を結をりめ生國法家則の
至る。ホ生死両うぐりこれよ任せ。善悪邪正因果覿面。
や。と説示し。刀を抜く亀王夫婦が。後方ハ徐よ歩をる。それと
りハ段ど情の身代王。仁あり義ある武士の。双の下よ
夫婦が今般の歎び。頸さ地く莞尓さし。南無と唱る声の下
よ。夫婦が首ハ落くく。丹左衛つ墓安ハ夫婦の首級を胞衣
桶よ擂き入れく。ひくとうち笑ひ。寛よ入道相國のあん威勢こそ

ちよりられ。既よ弁鶴蛾王ホ地を穿く躁是入くしども。土
地よ孫伏せり般牛若室中を飛行る御ありとも。いろはぐ
脱を果へた。鬼一法眼も。今ハ後悔すりめ。牛若丸よ捕捕く
進ぶせるるば。宥免せるるべたぞ。物ども来ようしそぐ立。二ツの首
桶をうた抱を。ロ曹司を尻目ようけく。階子を登りく主従四
人舊の中庭へ出るるとば。牛若。蛾
を打仰ぎ。頻りよ感嘆しうる。
〇かくく年若ハ。俊寛主従とうりよ。石室を出るんば。天ハ吾
ほのくと明しうり。さて吾ハ云のうる。残しるよ。吾們のく
既よ平家よ出るれば且くもこよ留まるぐ。蛾王ハ僧都親
子よ倶しく。九州へ赴くべ。これハ東へ走下るく。蛭小嶋へ階ゆた。

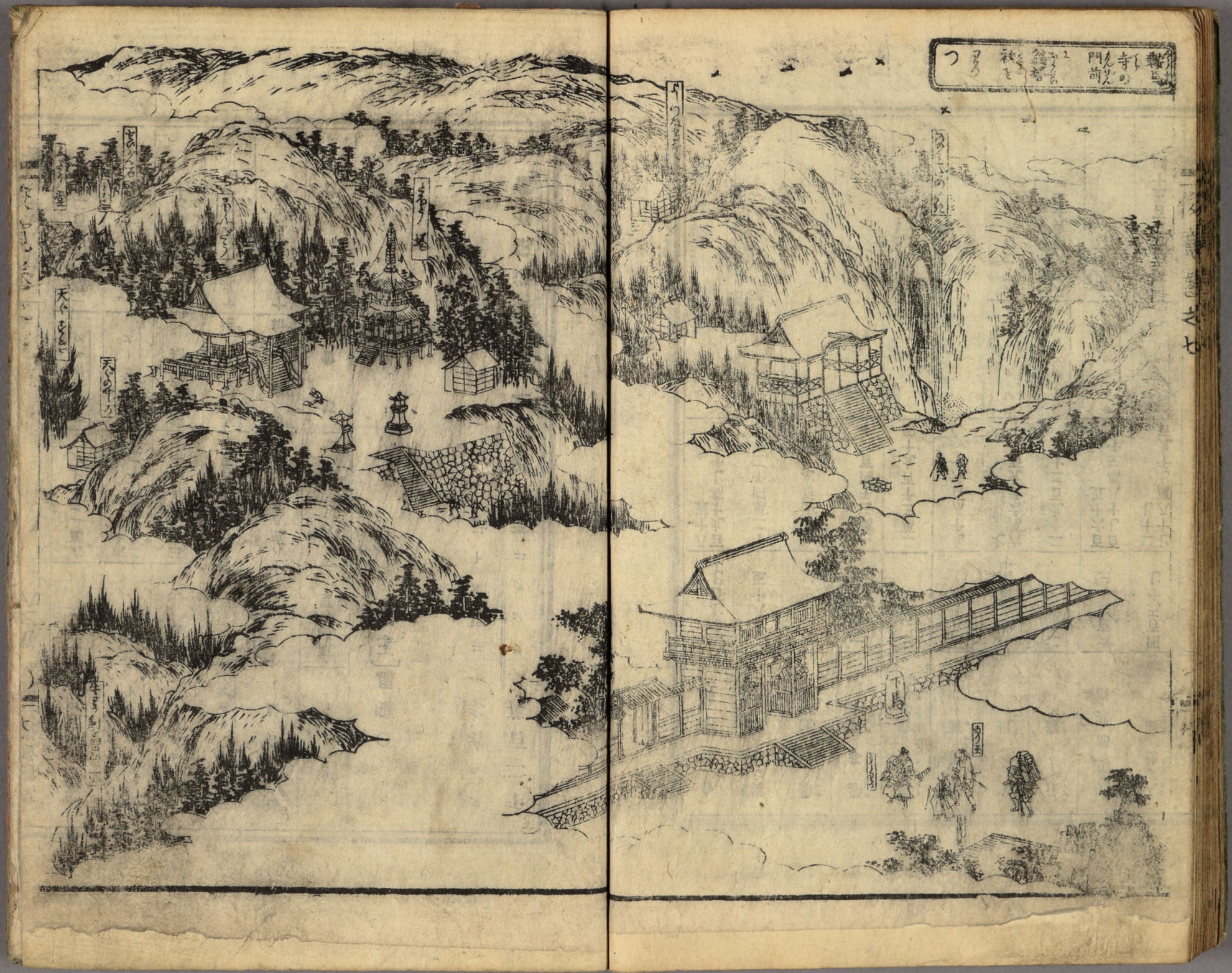
兄君頼朝より見参しく。義兵を起さんと。猶遅くばなり。五月大雨降べべしく。忙しく再會を契りつゝ。大悲山をぞ出ける。俊寛も。財宝のことを。納めて。親子主従俄頃に行装を整へ。ありもとも。鞍馬寺へ送りまゐらせる。道の次。されば。俊寛は鶴の前の像見の袖と経冊を鞍馬寺へ埋葬しく。塔婆を建。蛾王は兄亀王嫂渡海が軀を煙とすれども。鶴の前の袖塚の内へ葬つ。徳寿丸と。鬼界嶋へ。鶴の前の隻袖。風もなくしに。飄くと。空中へ消えの如。往方も知らざりける。一念彼袖に執着しく。曹司に契りひんいとも怪しとぞ。とひつ法が。俊寛は。牛若丸は。この鞍馬に生育

のひしく。女児が魂をとめし袖の。ちに埋らるゝ。本意なきあり。げに不思議なる因縁なり。と感もあくまで。諸る涙を押拭ひ。ずく戒刀を抜く。延て長生なる頭髻の雪を切て。舊の圓頂となりぬ。按ずるに義経紀大全の頭書に。鬼一法眼が女児。年十八にして。しなしく。屍を鞍馬寺に葬よりしく。亦山州名跡志に。帰一法眼が塚は。梶取の社を左に。北に到りて。羊町東のほとりに見えたり。梶取の社も鞍馬の近村。二の瀬にあり。これも鬼一が女児の塚なるべし。不題牛若丸を。鞍に東光坊を訪く。伊豆へ赴くなるを告。鶴の之助母子。亀王夫婦が追薦のため。叮嚀に頼を。笑え。忙しく寺を出ずく。東のほとく起行べし。俊寛赤三人も。牛若に

九州のくに〳〵に赴き。肥前國加世の庄に草庵を締びつゝ。後世を志のみ願ふ。その年八月。前兵衛佐頼朝く臣。石橋山より義兵を起しく。忽地関左八州を畧し。範頼義経を佐く。平家を西海に対滅し。僅に五年が間に。源氏一統の世となりぬれば。俊寛親子は。ひとりの外に世間廣くなりぬ。則加世の庄に一宇の堂舎を建立し。これを法勝寺と号す。かくて頼朝義経兄弟不和にまりて。義経は洛堀川の宿所を没落し。徙方知れずと聞えしかども。俊寛は。ふかくこれをうち歎き。やがて預倉へ赴き。和睦のすべをまづ洛せんとせしが。京都の守護北條時政に就く。愁訴の趣を述べとゝ。彼使は文治五年閏四月。義経は衣川の館に

自殺しぬ。俊寛はいとゞ悲傷して。後に肥前の法勝寺に帰りぬ。南都に到て。法華寺の傍に世を避。其外大往生を願ふとぞ。されば法華寺の傍に。俊寛僧都の石塔婆あり。近世ある人。これを敬て庭の置石ふるくなるその家忽地に崇あり。驚き怕れて。舊の如くに居しぬ。

歴史徴に載られつ。又徳義九蛾王ぞの。金賣吉次信隆が。足摺明神の縁起ホに漏せるもの。又は法勝寺の考證。併俊寛僧都の事迹ホに予が間常に管見する所をあつめて。附録一編を追加して。この書の全部八巻とす。その後編に至て。年既に季秋に向と


天ぐの手水
寺の門前

を起らん遑なし。その東陽日ごろ比を俟く。蓑笠南軒の梅花とうるはしく研を煎くべし。

○聞まいらん。中葉ごろ邦なく。兵法と稱るあり黎御のうへ。太平紀に。大塔宮兵法をよくしまして。六尺の屏風をこし。輒く飛越すりけり。と記せり。或人いはく。鬼一法眼ら軍学者あまた。劔法の師なり。鬼一が傳後その流ゝ。京八流と唱るゝ。紀せしものあり。甲陽の山本勘助うんど。京流の劔法をうくせしと所謂鬼一が傳流なるべしといふ。近世吉岡兼房ゝいひしものゝ。鬼一が兵法を傳しなりのゝ。俗說あり。ゆひあらべし。その稱呼誤り来るゝ。鬼一がうんぬ。世ゝ伝るかゝうゝぬ說のゝ。

俊寛僧都嶋物語卷之七終

中山堂